研究員レポート

住むまち・大阪の魅力発信に向けた博物館の新たなアウトリーチ

小西久美子
Konishi Kumiko

大阪市が開設した「大阪くらしの今昔館」は日本初の住まいをテーマにした専門博物館で、近世から近代にかけての大阪の都市居住の歴史・文化を体感できる。エネルギー・文化研究所では同館と連携して住むまち・大阪の魅力発信に向けた新たな試み「お出かけ今昔館」を行っている。

［こにし・くみこ］
大阪ガスネットワーク㈱エネルギー・文化研究所研究員。1991年、大阪ガス㈱入社。家庭用エネルギー部門で直営業、技術提案を経験後、地域開発関連部署で社有地開発・都市開発に関する業務に従事。その間、民間デベロッパー、URに出向し都市再生事業などを経験。地区総務では地域における発信・交流拠点となるショールームを併設した新社屋の建設を担当する。技術士（建設部門・都市及び地方計画）、一級建築士。2022年4月より現職。

大阪の都市居住文化の発信拠点「大阪くらしの今昔館」

2001年にオープンした「大阪市立住まいのミュージアム」[*1]は、大阪市北区天神橋筋六丁目の10階建てビルの中にあり「大阪くらしの今昔館」（以下、今昔館）の愛称で親しまれている。①「住まい」をテーマとした日本初の専門博物館、②高度な学術性をふまえ、市民の目線に立って歴史を読み解く、③見せる展示を超えた、体感する展示、④「住まいと暮らし」の情報交流拠点として集客型ミュージアムをめざすことを基本理念としている。

9階には天保年間（1830年代）の大坂の町並みが実物大で再現されており、現在の大阪のビルの中で、江戸時代の日々の暮らしの様子を体感することができる。その町並みを10階から俯瞰して眺めることができる演出も面白い。また、8階には、建物はもちろん、暮らしぶりや風俗まで細かく再現した精巧な模型が展示されており、明治・大正・昭和の大阪のまち・住まいと暮らしに触れることができる。

天保年間の町並みが再現されている「大阪くらしの今昔館」。

「町家衆」と呼ばれるボランティアが今昔館で行われるイベントの準備・運営を支えている点も大きな特長となっている。今昔館のボランティア養成講座を3回以上受講後、希望する方がボランティアとして登録し、「大阪くらしの今昔館 町家衆」として活動しているのだが、登録者数は約200名に上る。今昔館の基本理念の実現に彼らの存在は欠かせないものとなっている。

エネルギー・文化研究所と今昔館の関わり

エネルギー・文化研究所（以下、CEL）と今昔館は、計画・開設準備段階から協力関係にあったが、その関係性の持続性を高めるために、2015（平成27）年2月に包括連携協定を締結している。「大阪の住まいと暮らし・文化にかかる歴史・文化資源の活用などに関わる幅広い連携事業を相互に協力して実施することにより、都市居住魅力の発信、活力ある地域社会の創造に貢献すること」を目的に、大阪の住まいと暮らし・文化にかかるいくつかの実験的な試みを共同で行ってきた。

2017年には、内閣府が実施した「オリンピック・パラリンピック基本方針推進調査」の試行プロジェクトとして、今昔館主催で開催した「外国人にもわかる〝和の住まい文化劇場〟」に、包括連携協定の一環としてCELも全面協力。江戸時代の大坂のまちを再現した今昔館と、国の登録有形文化財である吉田家住宅（1921年建築）を舞台に、外国の方とともに、大阪の〝和の住まい文化〟の価値を再発見する試みを実施した。

その後も、吉田家住宅の座敷に今昔館所蔵の屏風や掛け軸をしつらえ、大阪のおもてなし文化を再現しながら、大阪の生活文化を学ぶ「上方生活文化堂」を全12回開講した。大阪の歴史や住まいについての上方文化講座と、趣向を凝らした旬の大阪料理を堪能する会で構成されており、上質で上品な大阪の生活文化を正しく認識、体感してもらい、後世に引き継いでいくための実践であった。

「お出かけ今昔館」の開催

コロナ禍で対面型の活動が制約される中、連携活動はしばらくなくなっていたが、CELと今昔館の新たな活動として「お出かけ今昔館」を共同で開催することになった。文字通り、今昔館から「お出かけ」してきた館蔵資料を専門家の解説を受けながら「鑑賞」した後、実際にまちを「探索」する市民参加型のイベントであるが、探索後には、参加者どうしで気付きを共有する「交流」の時間を設けることで、より地域への思いを深め、考える機会としてもらうことも狙いの一つである。

3月9日に開催した初回は、「お出かけ今昔館～豊臣大坂城下町への旅」と題し、今昔館が収蔵している元禄年間の「北平野町絵図」を用いた企画となっている。豊臣秀吉が大坂城を築城した際に、平野郷など周辺の町人を移住させて城下町を建設した。その時、最初に拓かれたのは大坂城の南側、上町台地と言われており、江戸時代まで「平野町」と呼ばれていた。「北平野町絵図」は、豊臣大坂城が落城し、徳川が大坂城を再築した後の元禄年間のものではあるが、詳細な町割・敷地割が描かれており当時のまちの骨格がよくわかる。その絵図に描かれている上町台地・北平野町を実際に探索することで、江戸時代から現在への変遷を感じ、豊臣秀吉の城下町構想に思いを馳せてもらうというものである。そして、絵図を展示する会場には上町台地に建つ大阪ガス実験集合住宅NEXT21を選んだ。

残念ながら「北平野町絵図」の実物を持ち出すことはかなわなかったが、事前に精緻な写真を撮影し、実物大で復元してNEXT21に展示した。その再現度はかなり高いものであった。また、絵図以外にも、現在の上町台地の模型も展示し、これから探索する地を立体的に把握してもらう工夫も行った。参加者は、案内人

上／「北平野町絵図」を鑑賞する参加者たち。中／案内人の谷直樹氏先導のもと、北平野町を探索する。下／古い町家も残る、風情のある街並み。

探索後、願生寺にて、お互いの感想を語り合う。

の谷直樹氏（大阪市立大学名誉教授・今昔館 前館長［＊2］）から、大坂の町が形成された歴史とあわせて絵図について解説を受けた後、展示物を間近に見て確認した。通常の博物館や美術館とは異なるシチュエーションで鑑賞ができるのは、「お出かけ今昔館」の醍醐味の一つと言える。

探索では、この地が形成された歴史的背景をより深く知ってもらうため、「北平野町絵図」の範囲にとどまらず、その周囲に広がる豊臣秀吉が築いた寺町界隈まで足を延ばした。そこに案内人の谷氏の解説が加わることで、一人でまちを歩いている時には気付かないものに気付き、新たな発見をしてもらうことができた。

探索後は、各々が感じたことを共有し上町台地への思いや理解を深めてもらうため、参加者同士で交流する時間を設けた。言葉として発することで、自らの気付きを整理することにもつながり、印象にも強く残ったのではないだろうか。ちなみに、最後の交流会の会場は北平野町の西方、谷町九丁目にある願生寺。願生寺は徳川大坂城御大工の山村与助の菩提寺でもあり、実現しなかった豊臣秀吉の大坂城下町構想に思いを馳せる場としての演出にもなった。

博物館の新たなアウトリーチとしての可能性

「お出かけ今昔館」を企画した背景には、2017（平成29）年の文化芸術振興基本法の改正（文化芸術基本法の施行）と2022（令和4）年の博物館法の改正がある。文化芸術基本法では、文化芸術の固有の意義と価値を尊重しつつも、文化芸術そのものの振興にとどまらず、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の関連分野における施策が法の範囲に取り込まれた。

元来、博物館は、社会教育法の中では「社会教育のための機関」の一つに位置付けられている。そのため、博物館法では「社会教育法の精神に基づき」、博物館の健全な発達を図ることで、国民の教育、学術及び文化の発展に寄与することを目的としてきたが、文化芸術基本法の施行を受け、博物館法は「文化芸術基本法の精神にも基づく」と改められた。さらに、他の博物館との連携、地域の多様な主体との連携・協力による文化観光など地域の活力の向上への寄与が努力義務化された。そのため、先述のとおり大阪の都市居住の発信拠点として圧倒的な存在感を誇ってきている今昔館にあっても、社会のための博物館としてさらなるアップデートや新たな領域への挑戦が必要になっている。

そのような背景のもと、今昔館の豊かなコンテンツを活用した地域への新たなアウトリーチとして「お出かけ今昔館」を企画した。博物館が民間施設と連携し館蔵資料をオンサイトで限定公開し、資料を通して、地域の方々と共に学びあう場を共創することを狙いとしている。今昔館は「上方生活文化堂」でも館蔵資料を館外（吉田家住宅）に展示した実績はあるが、今回の活動では、より地域との関係性が強くまちづくり的な要素も含む。まちづくりの文脈で博物館が地域の多様な主体と連携・協力、貢献できる新たなアウトリーチの形式・手法になり得るのではないかと考えている。

豊かな歴史をもった上町台地とNEXT21

「お出かけ今昔館」の会場は、大阪屈指の歴史を誇る上町台地とそこに立地する大阪ガス実験住宅NEXT21である。NEXT21は1993年に建設された大阪ガスの実験集合住宅（社宅）で、大阪ガスの社員が実際に居住し、環境「エネルギー」「暮らし」の面から、さまざまな実験・検証を30年以上続けている。

「お出かけ今昔館」の会場となったNEXT21。

2025年4月からは「まちで集まって住む意味を再定義する」というテーマで、第6フェーズの実験を行っている。その目的は、「暮らし全体が効率化重視となっている現在の都市居住において、人・自然・地域とのかかわりを改めて見つめ直すことにより、カーボンニュートラルと暮らしの豊かさ、個人化と地域のコミュニティ形成など、一見相反するものを両立させるための居住実験に取り組み、新たな意味を定義していきます」（大阪ガスHPより https://www.osakagas.co.jp/company/efforts/next21/）。

特筆すべきは、地域とのかかわりを改めて見つめ直すという点。実験社宅という性質上、建物内で完結する実験が中心で、居住者も数年単位で入れ替わることから、地域とのかかわりは限定的にならざるを得ない部分があった。しかし、2023年には「生きた建築ミュージアム・大阪セレクション」に選定され、毎年秋に開催される大阪の魅力ある建築を一斉に無料で公開する日本最大級の建築イベント「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪」（通称：イケフェス大阪）で一般向けの公開を行うなど、近年では地域に開く取り組みもなされている。建物が竣工して三十数年が経過すると、地域のシンボルとして、環境・防災はもちろん、生活文化面でも地域住民の拠り所となるような新たな役割を担うことも重要になってくるだろう。NEXT21としての思いのようなものが第6フェーズの実験テーマからもうかがえる。

「お出かけ今昔館」では、会場提供としての協力だけでなく、居住者の主体的な参加もあった。NEXT21が地域とのかかわりを見直す一つのきっかけになることを主催者としても願っている。

今後の期待

未来の住宅・住生活を実験するNEXT21と、大阪の住まいや暮らしの歴史を発信する今昔館は、ともに大阪を代表する居住文化の発信拠点である。未来と歴史、民間と公営という異なる立場の両者が、「お出かけ今昔館」を通じて、上町台地をフィールドに連携していくことで、新たな「住むまち・大阪」の魅力の創出につながることが期待される。

今昔館の新たなアウトリーチの模索のために企画した「お出かけ今昔館」であるが、今後は、今昔館の保有する豊かなコンテンツとナレッジをさらに活かした活動へと深化させていきたい。「北平野町絵図」以外にも今昔館には上町台地ゆかりの絵図や名所図会、近世大坂から明治・大正・昭和にいたる近代大阪のまちを再現した模型などの展示品や調査資料が多くある。それらを複合的に活用することで、時代的な奥行きを一層感じてもらえるものにしたい。

また、上町台地は、大阪屈指の歴史的地区であると同時に文教地区としての人気が高いエリアでもある。この地で活動を展開することで、筆者自身、大阪の都市居住の歴史や文化を再認識すると同時に、未来につなぎ活かしていくべき都市居住文化について検討を深めていきたい。

［補足］今昔館については、『CEL』112号（2016年3月発行）「見て、聞いて、触って楽しむ、住まいと暮らしの博物館」、『CEL』116号（2017年7月発行）「外からの目で上方文化の本質に迫る」、『CEL』118号（2018年3月発行）『ルネッセ』を実践するための新たな試み 文化講座『上方生活文化堂』を体験報告」でも詳しく紹介している。

注

＊1 大阪市立住まい情報センター条例に基づき設置された住宅政策上の博物館相当施設。現在、指定管理者制度により大阪市住宅供給公社・アクティオ共同事業体が運営している。

＊2 開館から2021年3月まで館長を務める。現在の館長は増井正哉京都大学・奈良女子大学名誉教授。